残酷な神様　LEGENDSアルセウス

ネクロズマ(日食)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『次元の歪み』の事件を解決して数ヶ月後の事

アルセウスフォンの啓示に従ってポケモン図鑑を完成させた僕は、天界で初めてこの世界の神と出会った。

だけど、『最後の試練』も何とか乗り越えた先で僕を待っていたのは、残酷な神の宣告だった。

目次

『帰れない』と『帰りたい』 ―― 1
『捜索』と『バトル』 ―― 14
『駆け引き』と『逢い引き』 ―― 30

『帰れない』と『帰りたい』

こんな事になるなんて思ってなかった。
「…そんな…僕はこれからどうすればいいんだ…」
天冠の山嶺、いずれ『槍の柱』と呼ばれる崩れたシンオウ神殿で、僕は1人何もない空間へと問いかけた。
寒冷な土地に加えてその中でも一際高い山の山頂、吐いた息が真っ白になる程の厳しい気温も、今は驚くほど何も感じられない。体は震えてるけど、それはきっとこの寒さが原因じゃない。
「…帰りたかった…僕は…ただそのためにこれまで頑張ってきたのに…」
その言葉を絞り出すのでやっとだった。
突然知らない世界へと飛ばされた時よりも、命を掛けてキングやクイーンと対峙した時よりも、そして理不尽に村を追われた時よりも、何倍もの絶望で体が震える。
ヒスイでの生活が嫌だった訳じゃない。村の人も、それぞれの団も、そしてショウやラベン博士もみんないい人達だ。でも、自分にとって本当の居場所はここじゃない。最終的には『元の時代へと帰して貰える』と思っていたからこそ、ここまで折れる事なく頑張ってこれたんだ。でも…
「あああああぁぁぁぁ!!」
最後は言葉も出なくて、ただ踞りながら絶叫するしか出来なかった。
僕は…
『帰れない』

ポケットモンスターＬＥＧＥＮＤアルセウス
残酷な神様

「あっ！テル！お帰りなさい！」
「…えっ…あっ…ショウ…？」

ことぶき村の入口で先輩団員であるショウから声を掛けられて僕はハッとした。回りを見渡すと、既に日は落ち掛けていて、オレンジの夕日が少し眩しく感じる。
正直どうやってここまで帰ってきたのか殆ど覚えてないけど、自分の足は自然とここに向かっていたらしい。
もう二度とここに戻ってくる事はないと思ってたのに。
「どうしたんですか!?　顔真っ青ですよ!」
「そうかな?　あぁ…いや…そうかもしれないね…」
心配そうに顔を覗き込むショウに最初は取り繕おうと思ったけど、傍目から見て相当酷い顔色をしてる事は自分でも何となく分かる。誤魔化すのは無駄だと思うし、ここは話を合わせておこう。
「ごめん　天冠山の実地調査でちょっと疲れたみたいだ。特に報告出来るような成果はないから、今日はこのまま宿舎で休むよ」
「そうして下さい　シマボシ隊長にはあたしから伝えておきますから」
「ありがとう」
「後でムベさんのイモモチをお持ちしますので、ゆっくりしていて下さい」
「気を使わせてごめんね」
「いえいえ　天冠山の単独調査なんてあたしにはとても出来ませんし、疲れて当然ですよ。とにかく、無事に戻ってきてくれて良かったです!」
「…うん　それじゃ僕はもう行くよ」
愛想のない短い受け答えだけして、僕は逃げるように宿舎の方へと足を進める。
『単独の実地調査』なんて方便だ。本当は黙ってそのままいなくなるつもりだったなんて言える筈がない。
「どうか無理はしないで下さいね　この村にはまだまだ貴方が必要ですから」
背中越しのその言葉に、僕は息がつまるような感覚がした。この世界には僕が”知ってた人”に似た人が多すぎる。

「また、帰ってきちゃったな…」
ガラガラと玄関のドアあけると、そこは綺麗に整理された殺風景な自分の部屋。
もう戻るつもりはなかったから、出発前に部屋の整理も済ませてたし、ちゃぶ台の上には置き手紙も置いていた。
(何が『もう戻ってこない。探さないで下さい』だよ…バカみたいだな。僕は…)
封の切られていない手紙をビリビリと破り捨て、僕は膝を抱えて畳に座り込む。
「これからどうしようかな…」
思えばずっと、僕はこの世界に対して疎外感を持っていた。ただポケモンを捕まえただけで過剰に期待を掛けられたり、バトルでは当然の指示をしただけで『天賦の才』と持て囃される。勿論時代が時代だ。確かに仕方がない部分はあるだろう。でも元いた遥か先の未来、ポケモンがいる生活が当たり前になっていた自分にとって、それは余りにも次元が違う世界だった。
ポケモンバトルは競い合うライバルがいてこそ最高に楽しいものだけど、『シンオウ地方の現チャンピオン』だった自分と、捕獲の概念が生まれたばかりのヒスイの人々とでは、バトル特有のあの緊迫感や興奮は終始生まれなかった。
荒ぶったキングやクイーンは確かに驚異だったけど、それは執拗に自分に狙いを定めてくるからで、一度ポケモンバトルに持ち込めば野生のポケモンの1匹に過ぎない。純粋な強さも立ち回りも技のキレも、遥か未来の四天王やジュン、シロナさんの手持ちには到底程遠い。
「僕は…なんで此処にいるんだろう…」
今まで何度も頭を過っては、その度に『使命があるからだ』と先送りにしていた疑問が頭の中でループする。
プライベートな話も殆ど通じない。好きだったポケモンバトルも満足に出来ない。この世界での目標もない。
そんな僕がこれ以上ここに留まり続ける事に何の意味があるのか。
気付けばまた涙が溢れる。

「…今ならアカギ（ギンガ団のリーダー）の気持ちも分かるよ…辛いな…回りに人はたくさんいるのに、僕は…本当の意味でその中には入れない…」
未来のギンガ団のリーダー、かつて敵対したその野望を思い起こす。誰からも理解されず、感情を悪としてそれがない世界を創造しようと画策したカリスマ的な悪党。
あの時は全く理解出来なかったけど、彼がこの孤独感を小さな頃から感じてたなら、それはどれ程の絶望だったんだろう。
「…そう言えば、あの人の野望を止めたのも今のシンオウ神殿だったな…これも因果応報っていうのかな…」
あの時のアカギと今の自分。
同じギンガ団という組織に所属して、目的の達成を目前に同じ場所でドン底に落とされた彼に、こんな時だけど僕は初めて親近感を覚えた。
案外、あの人と僕は似ているのかもしれないな。
（久しぶりに泣いたからかな…かなり疲れた…今日はもう寝よう…）
明日の事は目が覚めてから考えよう。少なくとも少し時間を空けないと満足に頭も回りそうにない。
ショウが玄関をノックする音が聞こえたけど、今は顔を見られてくない。
あれだけの体験をしたんだ。昼間の出来事は絶対夢に出てきそうだと思いながら、僕は座ったまま眠りに落ちた。

ーーーーーーーーー

「〜〜〜〜〜〜♪」
カンナギの笛が形を変えた『天界の笛』の音色が響く。
この時代、この地方に住むポケモン全てを捕獲して、今日、僕は天冠山の遥か上空、天界と呼ばれる場所でアルセウスに会った。
アルセウス≪神≫に会えば、全てが元に戻ると信じきって。
「これが僕達の全力だっ！ジュナイパー！三本の矢！」
「クルックー!!」
体勢を僅かに崩したアルセウスへと三本の闘気の矢が飛ぶ。

『最後の試練』と言われるだけはあり、アルセウスの攻撃は今まで戦ってきたどのポケモンよりも苛烈だった。
『1撃入れればいい』『手持ちの6匹全員で挑んでも構わない』という条件下でさえ、休まる事を知らない嵐のような猛攻にこちらが一方的に満身創痍だ。
そんな中、僅かな攻撃の間に捩じ込むようにゴウカザルとムクホークが地と空から捨て身のインファイトを仕掛け、ヒラリと交わされた瞬間にレントラーがスパークで一瞬だけ視界を奪い、着地寸前にトドゼルガが冷凍ビームで足場を凍らせ、バランスを崩した瞬間ヨノワールのサイコキネシスでコンマ1秒その体勢のまま拘束する。
ここを逃せば次はない。限界の連携攻撃だった。
だけど、ヨノワールの拘束を振り切ったアルセウスが、即座に飛来する3本の矢の迎撃に入る。
1本目、2本目の矢を瞬く間に裁きの礫で叩き落とし、最後の矢さえも間一髪でかわされた。
でも、まだだ！
「これが最後だぁ!!」
叩き落とされた矢が爆散する煙に乗じて、右手に鎮め玉を握り混んだ自分が走る。タイミングの都合礫の余波をまともに受ける事になったけど、アルセウスに接近するにはこれくらいの代償は仕方ない。
「！」
完全に不意を突く形、僕が4本目の矢だ。
至近距離から投げたアルセウス特性の鎮め玉は、パンっ！という小気味良い音を上げてその身体に命中した。
「……」
「……」
アルセウスと視線が合う。にらみ合いのような沈黙だけど、向こうから攻撃してくる様子はない。
これは僕の勝ちでいいんだろうか。
そう思っていると、頭の中に何処か優しい声が流れてくる。アルセ

ウスやディアルガ、パルキアといった神話のポケモンは、人語を介さない代わりに、その思念をテレパシーで他者に共有するのだ。
『試練をよく乗り越えた』『感謝している』『試練を越えた褒美に、自分の分身体を託す』
　不思議な力による”回復”を受けながら一通りの話を聞いた上で、僕は次に自分がここに来た目的を打ち明けた。
「アルセウス　あなたの望みを僕は叶えました。あなたの最後の試練も、今乗り越えてみせました。だから僕を…元いた時代に帰して下さい！」
　毅然とした佇まいを見せるアルセウスに僕は叫んだ。
『時空の裂け目』が消えたあの日から、僕はずっと小さな不安を抱えながら生きてきた。
　目に見える形で元の世界との繋がりが消えた今、そこに帰るためには神と言われるアルセウスに頼る他ない。実際僕は時空の裂け目に飲み込まれてこっちき来た訳じゃなくて、アルセウスに呼ばれてこの世界へと落ちて来たんだ。なら彼の望みを最後まで果たした今、創造神の力をもってすれば時空の裂け目に関係なく元の世界へと戻れる筈だ。
「……」
　しばらくの沈黙、でもそこで次に流れてきた情報は、僕が期待していたものとは全然違っていた。
「えっ…戻る事は…叶わな…い…」
　頭の中で目まぐるしく情報が入ってくる。初めは優しく聞こえたその声が、段々と無機質なように聞こえる。
「……」
「う…嘘だ」
　佇むアルセウスを前に、僕は呆然と膝から崩れ落ちていた。
　曰く、未来人である自分がこの時代に干渉した事で、この先の未来は厳密には『自分がいた時代とは別の世界』になったのだという。未来へといく事自体は神の力を使えば可能だけど、その時代の僕の席には既に『別の誰か』がいて、帰ったところで自分の居場所はないと。

言ってしまえば、初めてこの世界に来た状況に再び身を置くことになるという事だ。いや、出自不明でもやっていける過去の時代とは違い、未来の世界で『何処の誰かも分からない人間』などポケモンバトルがいくら上手かろうとまともには生きていけない。

アルセウスからのテレパシーは言葉を介さない分、正確な情報だけが頭に入ってくる。反論に対するあらゆる解答も同時にだ。異を挟む余地はそこにはない。

「うっ…！」

それと同時にアルセウス自身の意思も流れ込む。

神は事象に対して自身が直接干渉する事はしないと。

彼は人やポケモンが起こした問題は可能な限り人やポケモンの手で解決すべきだと考えている。それがどうにもならない場面でのみ、最低限の補助をするのが自身の役目だと。今回の『時空の裂け目』の事件がそれだ。過去の人間だけではどうにもならないと判断したからこそ、それを解決出来る”可能性がある”人間を未来から呼び寄せた。

ただ、アルセウスが神として干渉するのは”そこまで”なのだ。事件が解決したのなら、その先に関しては再びその世界の摂理に添うべきだというのが彼の神としての意見だ。でも

「ふざけるな…」

頭ではその立場や意見も分かる。いや、テレパシーで分からされたと言えるかも知れないけど、感情は別だ。神からの裏切りとも言える思念に僕の怒りは爆発した。

「ふざけるな！僕は神（お前）の道具じゃない！ここまでたくさんの試練を乗り越えて、その御褒美がこんな結末なんてあんまりじゃないかっ！」

「……」

「帰してよっ!!　僕のいた世界に!!　神様の理屈なんて知らないよ!!」

これまで抱えていたストレスの数々が一気に噴出する

世界を救える可能性があるから選ばれた？

そんなの冗談じゃない！別にそれは僕じゃなくても出来た事なら、

自分はただ貧乏クジを引いただけじゃないか。
「帰してよ…うぅ…」
　この世界に来て一度も流した事がなかった涙があふれてくる。もう過去にも未来にも、本当の『僕』を知ってる人はいない。母さんやジュン、ヒカリやナナカマド博士にも二度と会えないなんて、そんな現実はあんまりだ。最後に何を話したかなんて、僕はもう一つも覚えていないのに。
「……」
　でも、僕がいくら喚こうが、アルセウスが『神』としての立場を譲る事はやっぱりなかった。
　話は終わりだと言わんばかりに、僕の視界は光に包まれながらホワイトアウト。気付いた時には、天冠山の山頂にポツンと取り残されていた。
「…そんな、僕はこれからどうすればいいんだ…」
　すがるように天界の笛を吹いてみても、あの階段がもう一度現れる事はなかった。
ーーーーーー

　次の日
「……うん…ああ、やっぱり夢に出たか　最悪だ…」
　起床と同時に呟く。
　これ以上の悪夢なんて今の僕には思い付かない。まあ、実際は悪夢じゃなくてそれが現実なんだけど。
（責めて布団で寝ればよかったかな）
　時刻は朝の7時くらいだろうか。
　寒さには慣れてるけど、暖房が録にないヒスイ地方の夜は特に厳しい。
　固まった体をほぐして小さく伸びをする。
「あれだけ泣いたのって何時ぶりだろう…でも　ちょっとだけ楽になったかな…」
　一晩寝たお陰か意識はもうハッキリとしている。散々弱気になっ

たけど、元々１０才で殿堂入りして５年もシンオウ地方のチャンピオンを務めてたんだ。メンタル面だけは他人よりも強い自信はある。
（泣いてるだけじゃ何も解決しない。僕がどうしたいかが大事なんだ）
目を閉じて考えてみる。
『帰れない』『帰りたい』『帰れない』『帰りたい』
『帰りたい』『帰りたい』『帰りたい』『帰りたい!!』
今まではその内帰れるって勝手に安心していた。
『帰れない』と言われて初めて気付いた。
僕はやっぱり、どうしても在るべき場所に帰りたい。
母さんにもう一度会いたい！ヒカリやジュンと心から笑い合いたい！シロナさんやクロツグさんと本気のバトルがしたい！そしていつか父さんに追い付きたい！
絶対に諦めたくない！僕はここで終わりたくない！
（僕はまだ…諦めない！）
これから自分が何をすべきかも、今ならハッキリと分かる。
「これまでだって乗り越えて来たんだ…今回もきっと出来る」
簡単な事だ。
歴代最年少シンオウチャンピオンになれたのも、『時空の裂け目』の事件を解決出来たのも、図鑑を完成させてあの録でもない神様への道が開けたのも、回りのサポートはあったにせよ、詰まる所『自分が絶対に諦めなかったから』だ。
今回もそうだ。
帰れないと言われたから何だ。
あんな神様の言う事なんか関係ない。
僕は畳に転がったモンスターボールの内の１つに手を伸ばす。あの時山頂から投げ捨てるか迷いながら、それでも持ち帰った昨日の『戦利品』。
「ねえ神様…今度はあなたが僕に協力する番だよね」
『アルセウスの分身体』
〝分身〟とは言っても、実際は子供や模倣品に近い存在になるのだ

ろう。まあ本体程万能の力はないにしても、ディアルガやパルキアに匹敵する力はボールからヒシヒシと感じる。
この神様のコピーと、これまで集めたこの地方全てのポケモンの力を使えば必ず出来る。
アルセウスから得た情報を元に考えるなら、僕が元々いた世界は消えてしまった訳じゃない。あくまでこの先の未来が僕のいた世界と直接繋がらなくなっただけ。僕がここに存在してるなら、僕が生まれ育った未来が丸ごと消えてしまった可能性は限りなく低い。だから、(こんな現実僕は認めない　どんな事をしても絶対に元の世界に帰る)
例えもう一度『時空の裂け目』を作りだそうとも、いや、元いたの世界とこの過去の世界が切り離されてる以上、これを繋げるにはもう一度『裂け目』を起こす必要がある。
勿論そんな事をすれば、この世界のみんなから激しい非難を受けるだろう。でも、奪われた居場所を取り戻すにはこれしかない。どれだけ罵声を受けても必ずやり遂げる。
ウォロさんに出来たんだ。同じ人間の僕に出来ない筈がない。
そうと決まれば、後は行動するだけだ。
ふと、備え付けの全身鏡に写った自分の姿が目には入る
「酷い格好だな…」
昨日そのまま眠ったから、服はボロボロで髪はボサボサのまま、更に体が冷えきって血色まで悪くなってるし、流石にこのままギンガ団本部に行くのもちょっとどうかと思う。
「…とりあえずお風呂だな。それからムベさんの店にいって栄養を取って、最後に昨日の報告を適当に本部にしようか」
もう使うことはないと思っていたスペアの団服をタンスから引っ張り出して、気持ちを新たに僕は宿舎を出た。
ーーーーーーーー
「おはようございます！　テル」
「あっ！ショウ　おはよう！」
ムベさんの店で朝食を済ませたタイミングで、ちょうどバッタリと

ショウに出くわした。昨日の今日だ。向こうも僕の事を気に掛けてくれてたんだろう。彼女は小走りぎみに大丈夫ですか？と駆け寄ってくる。

自分としても彼女に用があったから、ここで会えたのは探す手間が省けてちょうどよかった。

「昨日はごめんね　僕あの後すぐに寝ちゃって」

「いえいえ　体調が戻ったみたいでよかったです！昨日のテル、何だかこのまま消えちゃいそうな雰囲気でしたから…」

「心配掛けたね。でももう大丈夫！　ほら、顔色だって昨日と全然ちがうでしょ？」

そう言って、僕はあっけらかんと自分の顔を指差してみる。銭湯で血色はバッチリ元に戻ったし、身だしなみも整えてある。パッと見はいつもの僕と何も違いはない筈だ。

彼女は「うーん？」とまじまじ自分の顔を覗き込んで来たけど、やがてなんとなく納得したように1歩引き下がった。

「まあテルがそういうなら信じますけど、くれぐれも無理はしないで下さいね」

「心配いらないよ　何て言うか、いろいろスッキリしたんだ、もう昨日みたいな事にはならない」

そう言って、僕は胸の内を悟られないようににこりと笑ってみせた。

『時空の裂け目』をもう一度作る。でも、それは僕一人の力じゃ上手くいかない事もあるかもしれない。そう考えた時に真っ先に浮かんだのが彼女だった。純真でお人好し、更にこの村では数少ない同年代の友人となれば、僕にとってはこの上なく”扱いやすい”。

「??　よくわからないですけど、元気になったなら嬉しいです。何かあれば遠慮なくあたしに相談して下さいね。テルは一人で抱え込む事が多いんですから」

「うん。ありがとう　これからも色々苦労を掛けるかもしれないけど”頼りにしてるからね”　ショウ」

「はい！　私に任せてください！」

満面の笑みでヒカリに似た少女は首を縦に振った。
彼女は優しくて、それでいて保護欲が強い。こちらが頼りにすると言えば言うほどそれに答えようと努力してくれるし、彼女なら曖昧な理由でも多少の無理は聞いてくれるだろう。『自覚なき協力者』ってやつだ。
後は…上手くできるか分からないけど、念には念を入れておこうか。
「そうだ。相談って訳じゃないけど、一度キチンと言っておかないといけない事があったんだ」
「早速ですね！　ドンと先輩に何でも言ってください！」
そう言ってえっへんと胸を張るショウ。
でも驚くだろうな。僕がこんな事言うなんて。
「こんな僕をいつも気に掛けてくれてありがとう。初めてこの世界に来た時から、ショウの優しさに僕は何度も救われてきた。本当に感謝してる。今の僕にとって、この世界での”一番”は間違いなく君だ」
「へっ…」
まさに鳩が豆鉄砲を喰らったようにショウは固まった。
こんなクサイ台詞は今まで言った事ないから、失敗したかとも思ったけど、数秒後、彼女の顔が面白いくらいにみるみる赤く染まった。どうやら上手くいったみたいだ。
「えっ!?えええ!?きゅ、急にどうしたんですか!?」
「素直な気持ちだよ　一度はっきり言っておきたかったんだ」
「でもその…あの…」
そこまでモジモジと恥ずかしそうにされると僕も少し困る。でもまあ、時代を考えれば彼女のこの反応は割と当然なのかもしれない。こんな使い古されたセリフでも、この時代だと十分『破廉恥』なのかもしれないな。
もし次があるなら、その時はもうちょっと時代を考えよう。
「それじゃあ、僕は本部に顔を出してくるよ」
まあとにかく、これで彼女への用事は済んだ。
次は団長と隊長への帰還報告だ。

「あっ！え!?　ちょっと待ってくださいよ！　テル！」
「じゃあ、またね」と手を振りながら、僕は足早にその場を立ち去った。
あの様子だと、こんな素人の思わせ振りでも少しは効果が期待出来そうだ。上手くいけばより彼女を動かしやすくなるかもしれない。
多少良心は痛むけど、もう決めたんだ。
目的のためには手段を選ばない。利用出来そうなものは何でも利用するって。
（これから忙しくなりそうだ…）
背中越しにショウが何か言ってるけど、振り返らずにギンガ団本部へと進む。今は彼女にこれ以上の用はない。
（次ははウォロさんの居場所を探さないとな）
『時空の裂け目』をもう一度開くなら、先の事件の首謀者にも協力してもらおう。彼は僕を疎ましく思ってるから普通に頼んでもまず協力してくれないだろうけど、幸い今の僕には最高の交渉材料がある。
アルセウス（この神の模倣品）を出汁に使えば、彼は必ず僕に力を貸す。
ギンガ団本部に顔を出すついでに、ウォロさんの足取りについての情報も探ってみよう。博士や団長なら何かしってるかもしれない。
（せいぜい役に立ってよ…神様…）
腰に携帯したモンスターボールに、心の中でそう呟いた。

『捜索』と『バトル』

紅蓮の湿地、古の隠れ里

「…そうですか。コギトさんの所にもやっぱり来ていませんか…」

「全く薄情なヤツよのう…これまで散々客として贔屓してやったというのに、事が済めばそれっきりじゃ」

屋外に据えられた洋風の椅子に腰掛け、ティーカップを片手におどけるように言うコギトさんとは反対に、僕は少しだけ肩を落とした。

「何か心当たりはありませんか？　何処の遺跡にいそうとか、何でもいいですから」

ギンガ団内でウォロさんの足取りを探ってみたものの、目立った収穫は０。イチョウ商会の人達にも掛け合ってみたけど、やっぱりあの戦い以降彼の姿を見た人はいなかった。それ以外で一番足取りを知ってそうな人物としてコギトさんのところまでやって来たけど、この様子だと此処でも得れるものはないかもしれない。

「放浪癖の人間が何処に行くかなぞ、この地から録に外に出とらん私には分からぬよ」

自虐的に微笑しながら彼女は言う。

やっぱりコギトさんでもダメか。

「…手間を取らせてすみません。ありがとうございました」

振る舞われたお茶には手を着けず、僕は彼女に背を向ける。何て言うか、この人は掴み所が無さ過ぎて難しい。

見た目はシロナさんと少し似てるけど、纏ってる雰囲気は全然違う。正直なところ、この人と目を合わせていると全てを見透かされてるようであまり居心地がよくない。

情報がないならここに長居は無用だ。でも

「まあ待て…そなた、今更あやつに接触してどうするつもりじゃ？」

そんな気持ちを察したように、コギトさんは立ち去ろうとする僕へと釘を刺した。

「それは…あの人は先の事件の首謀者です。放っておけば、また何処かで何か企むかもしれない」

「だからそなたが捕まえて罪を問うと？」
「はい…」
まるで尋問に掛けられてるような感覚。
コギトさんがティーカップをカタリとテーブルに置く。
それから数秒僕を見つめた後、彼女は怪しくフフッと笑った。
「嘘じゃな。では何故そなたはこの数ヶ月もの間あやつを放置しておったのじゃ？　危険だと感じたなら、それこそ先の一件があった時、シンオウ神殿でそのまま捕らえてしまえばよかったじゃろうに、何故今まで泳がせた？」
背筋を冷や汗が伝う。
「それは…あの時は僕もポケモンも満身創痍でしたし…今まではギンガ団の任務もありましたから」
「下手な嘘は止めよ…仮にもこの地の神2体を従えた英雄がウォロ1人捕らえられぬ筈なかろうて…それに、ギンガ団が今まで積極的にあやつを捜索しなかったのは、一重に〟そなたが頭目にそう掛け合ったからよな？〟」
「な、なんでそれを…？」
確かにプレートとギラティナを巡る一件の後、デンボク団長に事の顛末を報告した時に、僕がウォロさんについて情状酌量を求めた事は事実だ。でもその件についてはギンガ団とコンゴウ団、シンジュ団の上層部しか知らない筈。
「あれ程の大罪人じゃ、それぞれの団が組織を上げて捜索せぬなど相応の理由がなければ有り得んよ。あのデンボクという男なら尚の事。そなたが『ヤツにも同情すべき部分がある』とでも弁明したのじゃろう。違うか？」
完敗だ。そこまで正確に当てられるとぐうの音もでない。この人は人の心が読めるんじゃないだろうか。
コギトさんに情報を求めたのは悪手だったかもしれない。結果論とは言えあの時ウォロさんを捕らえていればと後悔する。
「……流石です。参りました。でもすみませんが、理由はまだ話せません」

「ほう?それは難儀じゃな…」
「……」
吸い込まれそう目を向けられた僕は固まる。
もしかすると自分がこれからやろうとしてる事さえ察しがついてるのかもしれない。平常心を保つようにはしてるけど主導権は完全に握られている状態。
これ以上ここにいると墓穴を掘続けるだけだろうし、もう退散するしかないと思った瞬間、コギトさんは僕から目線を外し、『まあ良い』とティーカップに口を付けた。緊張の糸が切れ、僕はホッと胸を撫で下ろす。
「少なくともあやつはもうヒスイにはおらんよ」
「…それは…なんでそう思うんですか?」
「あれ程の大事件じゃ、追われはせぬとて回りは敵だらけ。いや違うな…〟追われはせぬからこそあやつはヒスイから姿を消すじゃろう〟」
「えっ?」
「ウォロもバカではない。此度程の事件で自分に追っ手が付かねば『そなたに情けを掛けられた』事などすぐに気付く。 ヒスイにいる限り、あやつは言わば『そなたの掌の上で生かされてる』といっても過言はない。それを潔く認めるような男ではあるまい?」
なるほど、確かに筋は通ってる。
ウォロさんの事だ。ヒスイに現存するアルセウスに関する遺跡は今のところ全て訪れてるだろうし、アルセウスが僕を選び、神(プレート)への挑戦権も全てこちらの手元にある今、どうあがいてもあの人がアルセウスを使役する事は叶わない。『現状に限れば』だけど、確かに彼がこの地に固執する理由はないのかもしれない。
「最近ははじまりの浜から南に向けて船が出ておる。ワシがあやつならそれに紛れて別天地を目指すかのう…」
「なるほど…確かに一理あるかもしれません。助かりました」
軽く頭を下げ、僕は待機してくれていたアヤシシに跨がり隠れ里の出口へ進む。不意に

「そなたがウォロのようにならぬ事を願っていよう…」
背中から微かにそんな言葉が聞こえた気がした。
本当、この人は僕程度じゃとても利用出来そうにない。
ーーーーーーーーーーーー
『最近は南に向けて船が出ている』
時刻は2時を少し回ったくらい、紅蓮の湿地からの帰り道、アヤシシに揺られながら僕はさっきのコギトさんの言葉を考えていた。
(始まりの浜って近場だけどあまり行く事もないし、こっちからも船が出てるのは知らなかったな)
これまでも時々別の地方から新天地を目指した船が漂着していたし、ギンガ団の面々も元は南からこの大陸に移住して来た一団だ。なら逆にそちらへ向けての航路が確立している可能性は十分ある。デンボク団長が咄嗟の場面でコガネ弁が出るように、コトブキ村の住人はジョウト地方の出身者がかなり多い。ウォロさんがはじまりの浜から出航したなら、やはり一番可能性がありそうなのはジョウトだろうか。
(ジョウト…ジョウトか…漠然としてるなぁ)
一口にジョウトといっても何から手をつけていいのか全く分からない。僕自身ジョウトについては元の時代のアサギやエンジュくらいしか行ったことないし、そもそもウォロさんが本当にジョウト地方にいるのかさえ分からないのが現状だ。闇雲に探すだけ時間の無駄だろう。
確証は何もないし、コギトさんの助言も虚しく振り出しに戻ったかと思った時、ふと僕はある一つの可能性に気付いた。
「…ちょっと待てよ　もしかしたら…いや、でも確かにあり得ない事はないのか…?」
それは元の時代でシンオウとジョウトを結ぶ1つの遺跡の存在だ。僕も知識でしかしらないけど、確かあの遺跡の名前は…そうだ『シント遺跡』!
かつてシンオウ地方から移住してきた人々が、故郷の神を讃えてジョウトの人々と共同で建造したと伝えられている神殿”。内部は

シンオウ神殿とアルフの遺跡が融合した様式を持っていて、シンオウから遠く離れた地にも関わらず、アルセウスに関する伝承や文献が豊富に残されてらしい。

ヒスイからジョウトへの移住が始まってなら神殿が建造された時代と丁度合うし、アルセウスを盲信しているウォロさんならあれの建造に携わっていても不思議はない。というか、ジョウト地方（全く所縁のない土地）にも関わらず、最奥部にはアルセウスを降臨させるための舞台が丁寧に作り込まれてる事を考えると、最早ウォロさんが噛んだとしか思えなくなってくる。

「これは調べてみる価値がありそうだ」

確かシント遺跡はジョウトの最北端に近い場所にあった筈だ。一番近い人里はチョウジタウンだろうか。この時代にあの町があるかは分からないけど、ジョウトは全体的に歴史がある地方だし、誰かしらは住んでるだろう。ヒスイからはかなりの距離だけど、こっちにはアルセウスもパルキアもいる。長距離空間移動なんて対した話じゃない。

「まあ現地につけば後は足で探すしかないし、早速だけどショウにも少し手伝って貰おうか」

そろそろコトブキ村も近い。

今日はしっかり準備をして明日の朝出発だ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

コトブキ村へと戻ってきた僕は、一度本部に戻った後、すぐに手持ちのポケモンの入れ替えと買い物を済ませた。

向こうの地方ではこっちのライドポケモンは使えない。元の時代と同じように手持ちだけで対処する必要がある。まあアルセウス（神様）を使えば大抵は何とかなるだろうけど、あくまで模倣品のこのポケモンに過度な期待は出来ない。長距離空間移動にパルキアと、現地でウォロさんを捜索するために嗅覚が鋭くて移動も早いウインディあたりは連れていこう。万が一戦いになった場合に備え、それ以外は道中を長く共にしたジュナイパー、ゴウカザル、レントラーで固める。この3匹がいれば例えいかりの湖でギャラドスの群れに襲われようが簡

単に撃退出来るだろう。
後は写真屋さんが保管していたトゲピーと写るウォロさんの写真を借りてくれれば準備は完了だ。
「さてと、後はショウに声を掛けるだけだ」
隊長の話だと、彼女は今黒曜の原野でポケモンの捕獲やバトルのレクチャーをコトブキ村の住人に向けて行っているらしい。図鑑完成に伴って野生のポケモンの生態が分かった今、ポケモンとの共生も今後の重要な課題になる。『モンスターボールを扱える我々ギンガ団が、率先してその任務に当たるべきだ』とはシマボシ隊長の弁だ。
「夕方まではまだ時間があるし、黒曜の原野なら待ってるより行った方が早いかな」
待ってるとむしろ逆に団長や隊長に体よく使われるだろうし、帰ってきたばかりだけど僕はまた足早に村を出た。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

黒曜の原野に到着すると、すぐに原野ベースで村人に囲まれるショウを見つけた。この世界に来て初めて彼女から色々教えてもらったのもこの場所だから、なんだか少し懐かしい気持ちになる。
今は丁度バトルのデモンストレーション中だろうか。ショウのピカチュウが誰かと戦ってるみたいだ。
「あれは…ノボリさんとグライオン？」
あの特徴的な出で立ちは間違いない。なるほど、今回のはショウとノボリさんの合同任務って感じかな。
邪魔しちゃ悪いし、しばらく此処で見てようか。
「この対面は流石にピカチュウだと厳しいな…交代しないところを見ると、ショウの手持ちはもうピカチュウだけか…」
遠目だけど、戦況はどう見てもグライオンが圧倒している。ピカチュウは懸命にアイアンテールや電光石火を当てようとしてるけど、宙を飛び回るグライオンには掠りもしない。むしろ足元に無数にばら蒔かれてる『まきびし』が刺さって動く度にダメージを受けてるみたいだ。
「これは完璧に詰められてるな…やっぱりノボリさんは戦い方が上手

い」
　あの人の実力はこのヒスイの中では別格だ。それこそ、トレーナーとしての『個』の実力ならウォロさんや僕よりも数段上。ノボリさんはギンガ団ではないけど、『ポケモンバトル』を教える上で彼以上の適任者はいないと思う。
　ショウも団の中だと強い方だけど、今回は流石に相手が強すぎる。回りを囲んでる村人はショウに教えて貰ってるんじゃなくて、あれはたぶん終始劣勢の彼女を応援してるんだろう。
「僕とは考え方が違う人だけど、もし同じだったらいいライバルになれたのかな…」
　グライオンがジリジリとピカチュウを詰める。
　ポケモンの性質を理解して数手先を見越した立ち回りは凄いの一言だけど、ノボリさんは『ルールがある中での強さ、純粋なトレーナーとして実力』をとにかく重視する人だから、無差別にひたすらバトルを繰り返して経験と実力を積み上げてきた僕とはちょっと毛色が違う。
　戦い方もタワータイクーンのクロツグさんに近いし、こっちに来る前はその手の施設の強豪トレーナーだったのかもしれない。
（そうだ…そういえばノボリさんも僕と似た境遇じゃないか！）
　話を聞く限り、ノボリさんも時空の裂け目を通ってこの世界に流れ着いた存在だ。『帰りたい』か『帰りたくない』かで言えば前者だろう。記憶がないせいで僕と同じ世界から来たのかどうかは分からないけど、そこは話の仕方次第。ウォロさんに加えて彼が協力してくれるなら鬼に金棒じゃないか。
（ショウがいると『元の世界に帰る』ってワードは出せないし、後で二人きりになれるタイミングをどうにか作るしかないか）
　そんな事を考えてる内、ショウのピカチュウに体力の限界が来たらしい。愛くるしいフォルムがパタリと倒れる姿に、ショウの回りの村人達がざわついた。
「さて、そろそろ行こう」

―――――――――――――――――――――

「アタシの負けです。ノボリさん、お手合わせ下さりありがとうございました！」
「とんでもございません。ワタクシの方こそ、ありがとうございました」
バトルが終わり、それぞれのポケモンをボールに戻した後、ショウとノボリさんがガッチリと握手を交わした。
ギャラリーとなっていた村の人達の後ろから、僕はショウに向かって声を掛ける。
「ショウ！　お疲れ様！」
「えっ!?　わっ！テ、テル！どうして此処に!?」
振り返った彼女は僕の顔を見た途端に慌てふためく。
どうやらまだ今朝の事をかなり意識してるみたいだ。
あからさまに様子が変わった彼女に、村の人達やノボリさんもポカンとしてる。
「いいつから居たんですか!?」
「到着したのはついさっき。ショウを探しててね　今時間は大丈夫かな？」
「そ、そうですね…あの…今のバトルで今日の任務は一通り終わったので…えと…はい…大丈夫です」
慌てたかと思えば今度はぎこちなくモゴモゴと口ごもってる。裏表がないのはショウの美点だけど、流石にあんな思わせ振りでここまでの効果が出るとは正直思わなかった。レクチャーを受けていた村の人達も、一部は何かを察したのかニヤニヤしてる。まあこれだけ表情と態度に出てれば当然か。
「明日ちょっと用事に付き合って貰えないかな？ショウにしか頼めない事なんだけど」
「用事？…えと…任務ですか？」
「任務って訳じゃないんだけど、付いてきて欲しい所があって…ちょっと遠出になりそうなんだけど、どうだろう？」

「あたしにしか頼めない……任務じゃない……遠出………!!」
　今度は何かを考えるように急にボソボソと一人事のように呟く。
そして何の勘違いか、次の瞬間ショウの顔はさっきよりも更に赤く、
まるで火が吹き上がりそうな程真っ赤に染まる。そして
「それって…あの……もしかして…あ、あ、逢い引きのお誘いですか!!?」
「えっ?」
　ショウの思わぬ爆発発言が、周りの村人達をたちまち野次馬へと変えてしまった。

――――――――――――――――

　誤算だった。
　彼女を都合よく利用しようととした事への罰だろうか。ショウは性格的に村の人達によく可愛がられてるし、中には我が子のように接する人も少なからずいるくらいには村の人気者だ。
　そんな子が村の人達の前であんな事を言えばどうなるか、答えは簡単だった。
『ショウちゃんを泣かせたら許さない』、『男ならしっかり責任を果たせよ』『こんないい子は他にいない』『鼻垂れ小僧が百年早い』『娘(仮)はやらん』
「はぁぁ……」
　野次馬へと豹変した村の人達にもみくちゃにされた上、散々好き勝手言われた僕は、黒曜の原野の木陰で大きなため息をついた。
　この時代は僕が生きてきた時代よりも、よっぽどこの手の話には重みがあるみたいだ。少し軽率だったかもしれない
　結局なんとか『逢い引き』という名目でジョウト行きを取り付けはしたけど、村の人達に散々問い詰められたショウは、いたたまれなくなったのか野次馬達の護衛をほっぽりだして逃げるように村に帰っていった。昨日までの気心知れたやり取りなんて全く出来やしない『動かしやすくなる』どころか、これじゃかえって『扱いにくくなった

た』だけだ。
「大変な騒ぎでございましたね。あれほどの賑やかさは久しぶりです」
　木陰で休む僕の隣で、ノボリさんが表情を変えずにそう呟く。この人はショウ達が帰った後も、「もう少しやる事がある」って事でこうして残ってくれた。まあ僕としては二人きりで話せるタイミングが欲しかったから、そこだけは都合よくいったのかな。
「任務の最中にややこしい事になってすみません」
「お気になさらず。ショウ様も言っていた通り、もう後は村に帰省するだけでしたので」

「記憶の方はどうですか？」
「肝心な部分は相変わらずでございますが、バトルを通して何となく『自分がどういった人間だったのか』は掴めたように思います」
「どういった人間だったか、ですか…」
「はい。元の世界でも、ワタクシは確かにポケモンバトルに明け暮れる日々をおくっておりました。それが業務だったのか趣味だったのかは分かりませんが、とても充実していた事だけは間違いありません」
　そう答えるノボリさんの表情は、沈み掛けたオレンジ色の太陽と合わさって何処と無く寂しそうだった。
「テル様は〝シャンデラ〟というポケモンに覚えはありますでしょうか」
「一応知ってはいます。遠く離れた地方のポケモンですから、実際に見た事はないですけどね。でも、それが何か？」
「ワタクシの元いた世界でのパートナーです。最近はっきりと思い出せたのは、その名前と姿、ワタクシによくなついてくれておりました…」
　ノボリさんが空を見上げる。
　たまたまかもしれないけど、その視線はかつて時空の歪みがあった天冠山の山頂を向いていた。

「ノボリさんは、帰りたいですか？」
「そうでございますね。帰りたい…とは思いますが、実際今は何処に帰ればいいのかも分かりません。記憶を取り戻さない事には…」
まあこれは想像通りの答え。
後はここからどういう風に話を持っていくかだ。
でも、僕が次に言葉出すよりも早くノボリさんはスタっと立ち上がった。
「時にテル様　もしよろしければ、今からワタクシと一戦交えて頂けませんでしょうか？」
「え？　まあそれは構いませんけど、もうすぐ日が沈みますよ？」
「1体1のバトルでも構いません。貴方様とのバトルはワタクシの閉じた記憶を刺激する最高の薬です。ワタクシはどうしても過去を思い出したい。いや、思い出さなければならない。ここに残ったのもそのためでございます」
そう言って、ノボリさんはモンスターボールを1つだけ手に取った。まあ、僕の方の話は日が暮れてからも出来るし、卓越したトレーナーとのポケモンバトルはヒスイでは本当に貴重だ。それにバトルを通して少しでも記憶を取り戻せば、『帰りたい』って気持ちもより強くなるだろう。
「わかりました。そういう事ならよろこんで」
僕も腰に掛けたボールを1つ手にして立ち上がった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「行け！ジュナイパー！」
「フーディン！お行きなさい！」
僕とノボリさんが同時にボールを投げた。
パンという小気味いい音を上げて勢いよく出てきたジュナイパーとフーディンが相対して睨み会う。
「手加減は無用です！本気でいらしてください！」
ノボリさんが声を上げる。

言われるまでもない。フーディンか、ひとまずノボリさんがタイプ的には有利。中距離戦に持ち込まれると厄介なポケモンだけど、さあどう出てくるか。
「ではバトルの乗車開始といきましょう！フーディン！サイコキネシス！」
開戦と同時にノボリさんが動いた。
瞬間的に高められた念力でフーディンの回りに小石が無数に浮かんだかと思うと、それらが一斉にジュナイパーへと飛来する。まるで散弾銃みたいだ。いきなり容赦がないな。
だけど、
「ジュナイパー！叩き落とせ！」
「クゥルックー！」
コイツはそんな事じゃ動じない。
地面に爪をガッチリと食い込ませ、両腕を前に大きく振るう。ブオンという風切り音を上げて繰り出したのは『風起こし』なんてレベルじゃない空気の壁。無数にあった小石は全てその壁に飲み込まれ力なく落下した。
でも分かってる。たぶんこれはブラフだ。本命は
「フーディン！瞑想です！」
ジュナイパーの反撃の隙をついてフーディンが目を瞑る。やっぱりそうきたか。攻撃の合間の短いスパン事に念力の精度を上げていく器量は凄いけど、そうはさせない。
「ジュナイパー！矢羽根を飛ばせ！瞑想を止めるんだ！」
「!!」
ジュナイパーが瞬間的に弓を引いて矢羽根を連続で放つ。さっきの小石の意趣返しだ。小手先程度の技だけど、これでも防御が薄いフーディンなら1発でも当たればかなりの痛手になる筈。だけど
「フーディン！テレポート！」
瞑想を中断し、着弾の瞬間にフーディンはそれらを全てかわした。タイミング的にはバッチリだったつもりだけど、あれを全部避けれるのは流石だ。

「ジュナイパー！リーフブレードとシャドークローで追撃！距離を取らせるな！」
「クルクルウゥ！」
「当たる訳には参りません！連続でテレポート！」
間髪入れずにジュナイパーがフーディンの懐に飛び込む。
両腕で繰り出すリーフブレードと回し蹴りの要領で足の爪で繰り出すシャドークローの連携は、まるで激しい舞を踊っているかのような怒涛の連撃だけど、フーディンはこれをギリギリのタイミングで全て避けていく。
一件膠着状態だけどこれでいい。緊急時のテレポートは長距離間を移動出来ない。つまりジュナイパーが攻撃を止めない限りフーディンは自分の強みを活かせる距離を取れない。となれば後は体力勝負だ。極限近くまで鍛えたヒスイのジュナイパーにスタミナ切れはない。
そして
「クルウゥ!!」
「フーディン！後ろに飛びなさい！」
何十回にも渡る転移で念力（体力）の限界に達したのか、フーディンがジュナイパーが振るった腕をテレポートじゃなく後ろに倒れ込む形で間一髪避ける。これで終わりだ。
「ジュナイパー！止めのリーフブレード！」
体勢を崩したフーディンにジュナイパーの翼が横凪ぎに迫る。これで詰みだ。
でも、僕が勝ちを確信した時にそれは起きた。
「今ですフーディン！炎のパンチ！」
「えっ!?」
ほのおの…パンチ…!?
一瞬頭が混乱する。瞑想までしてきたフーディンが物理技!?
でも実際、目の前にいるフーディンはジュナイパーのリーフブレードにカウンターを取る形で肉薄し、スプーンごと握り混んだ炎の拳を打ち出した。完全に不意を突いたそれは、ドンっという鈍い音を上げ

てジュナイパーの腹部に直撃する。
「グルゥッ!?」
「ジュナイパー!」
ジュナイパーが腹部を押さえ膝を折った。あの初速の早さは早業か。元の威力は対した事なさそうだけど、それでも弱点タイプをまともに急所に受ければ話は違う。
そしてその隙をノボリさんは見逃さなかった。
「フーディン!もう一度瞑想!そしてサイコキネシス!」
強化された念力がジュナイパーの体を容易く宙に持ち上げる。
これは完全にしてやられた。体力が尽きたと思わせといてまだ余力を残してたのか。
「何とか振りほどくんだジュナイパー!ブレイブバード!」
「させません!叩きつけなさい!」
「グルッ!!」
地面に叩きつけられてジュナイパーの行動が妨害される。そして起き上がろうとしたところをまた体を持ち上げられる。そして
「これで終わりです! フーディン!投げ飛ばしなさい!」
抵抗出来ずに投げ飛ばされたジュナイパーは原野の木々を数本薙ぎ倒す程の勢いで遥か遠くまで飛ばされ、最後は水辺の巨岩にドゴンとその体を打ち付けた。
土煙が激しく舞い上がる。
あの威力、瞑想で強化した上に力技まで掛けてるのか。
「テル様、さっきの油断はよろしくありませんね」
技の応酬が止んで一瞬静まり返る黒曜の原野に、ノボリさんの声が響く。
「…ホントその通りです。まんまとやられました」
流石ノボリさんだ。相手の心理や行動を上手く利用した上で、的確に最大限のダメージを与えてくる。
指示の正確さも計算された立ち回りも、そして今の奇襲もこの時代のトレーナーでは絶対に追い付けない境地だ。元の時代を含めて考えても、この人にトレーナーとして勝てる人間が一体どれだけいるだ

ろうか。
ただ、
「…でも、ノボリさんの方こそ油断しない方がいい」
今のノボリさんはさっきの自分と同じだ。
「ん？」
弱点タイプの技を何度も受け、最後は力技で締めたんだ。普通は決着がついたと思うだろう。けど、
「”僕のジュナイパーは”この程度じゃ倒れない！」
確かに純粋なポケモントレーナーとしてのレベルはノボリさんの方が上だ。けど、”ポケモン本体のレベル”も含めた総合値なら話は別。僕だって伊達に5年もチャンピオンを張ってた訳じゃない。
声を大にして叫ぶ。”レベルの違い”を見せるのはここからだ！
「そこから撃ち抜け!!!ジュナイパー!!!」
「なっ！…まさか?!」
僕の一声で遥か先の水辺に視線を向けたノボリさんの表情が歪む。土煙が晴れた時、そこにはいるのは夕日を背に弓を構えたジュナイパー。その背後には闘気で錬成された三本のミサイルのように巨大な矢が浮かぶ。
狙撃手（ジュナイパー）に距離と時間を与えたのが運の尽きだ。いくら強化されたフーディンでも100ヤードを越える距離には干渉出来ない。いや、仮に出来たとしても、フーディンのレベルでジュナイパーのあの矢を止めれはしない。
「フーディン！アレは何としても避けて下さい！」
ノボリさんもそれを瞬時に判断して指示を出した。直撃、バシュンと放たれた三本の矢が轟音を上げてフーディンへと直進する。対してフーディンは指示通りのテレポートで瞬時に軌道外へと移動した。3本の矢が虚空を切る。
でもそのくらいじゃこの攻撃は終わらない。
だってこの矢はジュナイパーの闘気、言わば『意思を持った矢』なんだから。
フーディンがテレポートした直後、矢の起動が90度直角に曲がっ

てそれぞれ追尾する。
「危ないフーディン!!くっ!もう一度テレポートです!」
長距離テレポートを行う余裕は与えない。
フーディンはさっきと同じように緊急テレポートで避けようとするけど、最大出力(技)のこの矢は着弾すれば広範囲を巻き込む。受ける事も、避ける事も、逃げる事もこの矢は許さない。
囲い込むように変幻自在に軌道を変える3本の矢は転移先丸ごとフーディンを捉え、そして、
閃光を上げてドカンと弾けた。

『駆け引き』と『逢い引き』

黒曜の原野

「お見事でございます…慢心していたのはワタクシの方でしたか……それはともかく、いいバトルでした」

日もいよいよ落ちそうな黒曜の原野、バトルが終わった後、ノボリさんは満足そうにそう呟いた。

「ありがとうございました。でも勝てたのは正直ジュナイパーのお陰です。トレーナーとしては僕の敗けでした」

「それも含めて貴方様の実力でございます。やはりいいものですね、ポケモンバトルは。…歴戦のトレーナーと戦い、そして己の限界に挑む…記憶を失っても、これがワタクシの生き方である事だけは間違いなさそうです」

「そうですね。僕もそれは同じです」

戦ってみて改めて感じたけど、やっぱりこの人と僕はちょっと似てる。

『個』としてか『全』としてかで方向性は違っても、『強い相手と戦い、より強くなりたい』って思いは同じ。『帰りたい』か『帰りたくない』かは置いておいたとしても、少なくともこの人は僕と同じように現状に満足していない。そこをつけば協力をこぎつけやすくなるかもしれないな。さて、次は僕が用事を済ませる番だ

「ノボリさん、突然ですけど、もし良ければ僕のいた時代に一緒に行きませんか?」

「それは…あの…どういう事でしょうか?」

唐突な質問にノボリさんが首を傾げる。

まあいきなりだから当然か。でも時空の裂け目をもう一度開くなら、最終的にギンガ団やコンゴウ団、シンジュ団との衝突は十分考えられる。僕としては是非ノボリさんは味方に引き入れたい。

「実は…僕は近々この世界から去るつもりなんです。元の時代でやり残した事が沢山あるから。その時にノボリさんも一緒にどうかと思って」

「元の時代に帰る…ですか…詳しく伺ってもよろしいでしょうか？」
興味を引けたのか、ノボリさんの目の色が少し変わった。ここからが重要だ。多少のリスクは覚悟して話を進めよう。
「ノボリさんも知っての通り、今僕の手元にはディアルガとパルキアの2体が揃っています。それに加えて、先の事件のきっかけとも言えるギラティナもこの間捕獲しました。時空に干渉出来るこの3体ともう1体、アルセウスの力を借りてこの世界から脱出します。『時空の裂け目』をもう一度開いて…」
「ちょっと待って下さいテル様！アルセウス!?時空の裂け目をもう一度開く!?話についていけません…突拍子が無さすぎて混乱してしまいます」
「そうですね。順を追って説明します」
珍しく動揺してるノボリさんに僕はこれまでの経緯を話した。
アルセウスフォンの啓示に従って全てのポケモンを捕獲した事、天界でアルセウスと遭遇した事。そしてその神の分身体を持ち帰った事。勿論、少なくとも今の時点では永遠に帰れない事も。全てを話終わる頃には、納得はいかずとも合点はいったらしく、彼もいつも通りの平静さを取り戻した。
「…御話は理解致しました…しかし…時空の裂け目をもう一度開くなど…」
あれだけ苦労して歪みを閉じたんだ。この世界に与える影響を考えても、ノボリさんが歯切れ悪くなるのも分かる。ただ、この時代の人間であるショウとは違って、彼には可能な限りの情報は共有したい。僕の目的が『時代の裂け目』を開いた先にある以上、それを隠すと最終的には離反される可能性が高いからだ。密告されるリスクは承知だけど、そこは勿論厳重に釘を刺す。大丈夫だ。簡単には口を割らせないだけの手札がこっちにはある。
「納得いかない部分があるのは分かりますが、もうこれしか方法がないんです…それに…」
「それに…なんでしょうか…？」
「元の世界に戻る鍵になるアルセウス達が僕の手元にいる以上、”僕

がいなければ未来への移動は叶いません”。ノボリさんが一緒に行かなくても僕は行きます。だから時空の裂け目が消えている今、”その時を逃せばこの世界から出る事は永遠に出来ないと思ってください”」

「!!」

ノボリさんの表情が険しく変わる。

気持ちはよく分かるよ。僕もアルセウス[神様]から帰れないって言われた時は、たぶん同じような気持ちだったから。

「…で、ですが…もし未来に行けたとしても、そこがワタクシのいた世界かを判断する事は、今のワタクシには…」

もう一押しだ。確実にノボリさんはこっち側に揺れてる。後は仕上げを残すのみ。

「貴方は『強い相手とバトルする事で記憶が少しずつ戻っていく』。でもヒスイだとそういう相手はホントに希だ。僕のいた時代がノボリさんのいた時代と同じかは分からないですけど、少なくともあの世界には強いポケモントレーナーが沢山いる。記憶を取り戻すには今より適した環境だと思います」

「そ、それは…」

彼の望みを利用させてもらう。

「記憶が戻った時、もし今いる時代がノボリさんのいた時代じゃないならもう一度時間を飛べばいい。勿論その時は僕も協力します。だから、この世界から僕の時代に戻る時には、僕に協力してくれませんか?」

「……」

考え込む様にノボリさんは首を下に向けた。生真面目な彼の事だ。きっと今はシンジュ団への裏切りとも取れる行為に良心を痛めてる筈。でも、ノボリさんがいつも羽織ってるボロボロの服と帽子を見れば分かる。この人は此処で諦めたりはしない。

そしてしばらくの沈黙の後、ノボリさんは意を決したようにゆっくりと口を開いた。

「…分かりました…貴方様に協力しましょう」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると心強いです」
原野の夕日は、気付けばもう完全に落ちきっていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次の日
時刻は朝の9時、ショウとの待ち合わせ場所に指定したコトブキ村の入り口。
時間通りに来たつもりだけど、『はじまりの浜』に続く門の前にショウはまだいない。昨日の様子だと忘れてるなんて事はあり得ないだろうけど、集合時間に遅れるなんて彼女にしては珍しい事だ。
「ふぅ…逢い引き(デート)ねぇ…」
少しだけ気が重くなる。
ショウの事は勿論嫌いじゃないし、一緒に任務をこなす事も全然平気だ。でもヒカリとほぼ同じ顔の彼女とデートとなると違和感が物凄い。少しでも自分に気を引ければと思った一言がまさかこうなるとは。
まあでもあくまで逢い引きは名目だ。ウォロさんの捜索を手伝ってくれるなら理由は何だっていいか。それに
「これも最後の思い出作りだと思えば、案外楽しいかもしれないな…」
これまでずっと任務と指令漬けの日々だったし、これからもっと忙しくなるだろう。今の内にプチ旅行くらいの気分転換も必要かもしれない。
「お待たせしました。あの、遅れてしまってすみません」
「大丈夫だよ。僕も今来たと…こ…?」
集合時間から5分程たった頃、背中から聞こえた声に振り向くと、そこにいたのはいつもの団服の彼女ではなく、村の女性が来ているような紺色の和装姿。
見慣れない姿に一瞬固まってしまったけど、そうか、確かに団服でデートは考えてみればおかしいな。
(ていうか、ほっかむり着けてないと本当にヒカリと見分けがつかな

いな）
性格はショウの方が控えめだけど、ここまで外見が一緒だとヒカリとデートしてると錯覚しそうだ。元の世界じゃそんな雰囲気になった事もないから、何て言うか、不思議な気分だ。
「あの…あまりこういった格好はしないので…変ですか？」
「あっ！ごめんごめん。ちょっと新鮮で驚いただけだよ」
ショウは恥ずかしそうな素振りを見せてる。少しジロジロ見すぎたみたいだ。
こんな時ヒカリならどういうリアクションをするのかな。まあ若干勝ち気なところがあるし、たぶん「ジロジロ見すぎ！」とかズバッといわれそうだ。
「ていうか、僕の方こそいつもの団服でごめんね。呉服屋さんで何か仕立てて貰っとけば良かったんだけど…」
「いえ…テ、テルはその格好が一番似合ってますから…」
目線を下にしながらショウは呟く。
これは気を使われてるのか本心なのか。
まあ今はどっちでもいいか。
「時間も限られてるし、取り敢えず『はじまりの浜』まで取り敢えず歩こうか」
ショウを促して僕は浜に向かって歩き出す。
「そ、そういえば、昨日キチンと行き先を聞けてなかったんですけど、あの、今日はどちらに向かわれるのですか？」
「ああ、うん…まあちょっと〝ジョウト観光〟ってところかな」
「えっ！ジョウト地方ですか!?」
ショウが驚くのも無理はないか。
普通に考えればヒスイからジョウトは遠出ってレベルじゃないし。
「パルキアがいれば時間は掛からないよ。まあちょっと見てて」
僕はオリジンボールを取り出して、誰もいない浜辺に向けてそれを投げた。直後、薄桃色の巨体が姿を表す。
空間ポケモンパルキア、離れた空間同士を繋ぎ会わせる事が出来るこの地方の神の1体だ。

浜辺にズシンと着地して、パルキアはゆっくりと僕達に顔を向けた。
「パルキア、ここから遥か南に『鈴の塔』っていうかなり大きな建物がある筈だ。『そこ』と『この場所』を繋げてほしい。出来るかい？」
僕の問いかけに一瞬だけ時間を置いた後、パルキアは無言で小さく頷いた。大きな足跡をつけながら波打ち際まで移動すると、パルキアは腕を大きく振り抜く。
すると、
「これは…!?凄いです…」
空間が切り裂かれた、いや引きちぎられたみたいに、虚空にポッカリと穴が空いた。穴の先には別の景色が広がっていて、その奥にはいつか元の世界で見たジョウトを代表する塔が聳え立っている。見た目的には海の上に塔が見える訳だから、ショウがびっくりするのも仕方ない。
「ありがとうパルキア。さあ出発しようか」
「あっ…」
唖然とするショウの手を引いて、僕達は穴の先に広がるジョウト地方へと足を踏み入れた。

―――――――――――――――――――――

エンジュシティ
ジョウト地方ではコガネシティと並ぶ地方を代表する古都。歴史がある場所だけに、この街の風景は僕がいた時代と比べてもそこまで大きな変化がない。
大きく違うのはポケモンジムやポケモンセンターがない事と、『鈴の塔』の隣にまだ『鐘の塔』が現存してるくらいだろうか。
些細な部分だと、後は街の呼び名が今は『エンジュ町』って言われてる。
シント遺跡はチョウジタウンの最北端になるから、ウォロさんが港町のアサギから上陸してるなら必ずこの街を経由してるはず。あの人はこの時代では顔も含めてかなり目立つ容姿をしてるから、何かしらの情報は得られるかもしれない。

人目につかない『鈴の塔』の裏手側からジョウト入りした僕とショウは、そのまま活気ある町の中を並んで歩いた。
ウォロさん探しが主目的ではあるけど、まあ少しくらいは観光する時間もあるだろうって事で、何となく街を歩きながら大小様々な店や露店を見て回る。
「まだ朝方なのに人がすごいね。コトブキ村とはやっぱり全然違う」
「そうですね。こうやってお店を見てるだけでも楽しいです」
気が付けばショウも普段と同じように普通に会話するようになっていた。人混みを歩く内に慣れたのかな。
「そういえば、テルはジョウトに来たことがあるのですか？この街の事結構詳しいみたいですけど」
「そうだね。元いた世界で何回か来たことはあるよ。そんなに詳しい訳でもないけど、この街は僕の知ってる街とそんなに大きく変わらないから歩きやすいのかもね」
「そうですか…」
ショウは短い返事を返す。
（うーん、一応デートっぽいけど…何か引っ掛かる）
隣を歩くショウを横目にそう思う。
確かに緊張はしてなさそうだけど、今度は時々何処と無く寂しそうな顔を覗かせてる。露店で目を輝かせたりもしてたから、街を見て回るのが退屈って訳でもなさそうだけど…
「ねえショウ、何か気になる事でもある？」
「えっ？　どうしてですか？」
「僕の勘違いならいいんだけど、何となく『心此処に在らず』って感じだったから」
「そんな事は…いえ…そうかもしれませんね。私自身、”またジョウトに帰って来れる日が来るなんて思わなかったもので…”」
「えっ？」
突然のカミングアウトだけど、考えてみれば団長と一緒にヒスイに来たのならショウもこの地方が地元になるのは当然か。思い返してみると僕は彼女の過去って何も知らないな。

「そう言えばショウがギンガ団に入る前の事って、これまで一度も聞いた事なかったよね。もしかしてこの街が地元だったりするの？」
　呑気にそんな事を聞いた僕に、ショウは「いえ…」と首を横に振る。そして返ってきた答えは、僕の想像を遥かに越えて過酷なものだった。
「…隠してた訳じゃないんですけど、アタシが元々住んでいた街はここから程近い場所にあったんです。チョウジ町っていうんですけど、穏やかないい町でした」
　チョウジ…いい町”でした”。
　そのワードだけで嫌な予感がした。
「でもある日1匹のギャラドスに村を丸ごと焼かれてしまって…見た事もないくらい大きくて…凶暴で…アタシが住んでた家も、そのギャラドスに押し潰されてなくなっちゃいました…」
「!!」
「アタシだけは運よく瓦礫の山の中から団長に引き上げて頂いて助かりましたけど、父や母とはそれっきりになってしまいました。その後は、生き残った人と一緒に逃げるようにヒスイに渡ったんです」
「……」
　言葉が何も見つからない。
　昔本で読んだ事がある。その昔荒れ狂ったギャラドスが街の全てを破壊して、出来上がった巨大なクレーターに雨水が溜まって出来たのが『イカリの湖』だって。
　まさかデンボク団長やショウがその破壊された町の生き残りだとは夢にも思わなかったけど、団長がこれまで過剰に野生のポケモンに対して警戒心を持ってた理由がやっと分かった。
「そうだったんだ…ごめんね。もしここに居る辛いなら今からでもヒスイに戻るけど…」
　ウォロさん探しに協力してもらうつもりだったけど、悪戯に過去のトラウマを抉るような事はしたくない。
　ショウには別のところで協力してもらおうかと考えてると、彼女は首を横に勢いよく振った。

「いえいえ！気を使わせてしまってすみません！気持ちの整理はもう出来てるのでそれは大丈夫です」
「そっか…ショウは強いね」
　僕とは大違いだ…
　故郷に帰れないって点では僕と何も違わないのに…
「ただあの時は逃げる事で手一杯で、父や母の供養が何一つ出来なかった事が心残りで、お墓だけでも立ててあげたかったなって…町を歩きながらそんな事を思ってしまいました。気を使わせてしまってすみません…」
　なるほど、さっきから感じた違和感はそれが原因か。
「ねえショウ、もしよかったらだけど、今から村の人のお墓、立てに行かない？」
「えっ!?」
「立派な物は流石に無理だけど、墓石になる石とお供えする花があれば形くらいは出来る　ジュナイパーを連れてきてるから石を切り出すのは難しくないし、どうかな？」
　ウォロさんを探すためにジョウトに来たのに、気付けば僕はそんな事を口走っていた。
　知らなかった彼女の過去に対する同情なのか、聞いてしまった事への責任なのかは分からないけど、それくらいの願いは叶えてあげたいってのが今の素直な気持ちだ。
「それは嬉しいですけど…で…でも　あのギャラドスがまだあそこにいるかもしれませんし…もしまた襲われたらと思うと…」
　そう言ってショウは下を向いた。
　生きるか死ぬかの壮絶な経験をしたんだ。乗り越えたとは言ってもトラウマが残るのは当たり前だろう。
「ならまずは僕が様子を見てくる　ウインディなら直ぐに行ける距離だしね。もしまだそこ居るようならどうにかしてくるよ」
「そんな事頼めませんよ！　それでもし何かあったら…」
「心配いらないよ。〝ショウ先輩〟のおかげで調査任務には慣れたものだから　キングやクイーンと戦う心構えで行ってくる」

ギャラドスは確かに凶暴なポケモンだけど、僕もこれまでキングやクイーン、それに伝説と言われるポケモン達に挑んで来た経験がある。やる事自体は一緒だ。むしろ鎮め玉を直接投げ付ける必要がないだけマシかもしれない。慣れもあるけど、改めて考えるととんでもない任務だな…

「うぅ…もしギャラドスを見つけても絶対に無理はしないって約束してくれますか?」

「分かったよ　無理そうなら諦める　安全が確認出来たら直ぐに戻ってくるから、ショウはその間にお供えする花を摘んでおいて」

「分かりました。テルを信じます」

イカリの湖がある場所ならだいたい分かる。

ここから東の小さな山を越えて北の方角だ。ウインディの速度なら30分も走れば着く。もし件のギャラドスと鉢合わせて対処を迫られたとしても2時間あれば帰って来れるだろう。

ショウに手を振りながら僕は街の外に向けて歩き出した。

――――――――――――――――――――

ウインディに揺られて山越え、森を越え、道らしき物を見つけてからはそれを辿るようにしばらく木々の中を北上すると、視界が開けた場所に出た。

どうやら街の跡地に着いたみたいだ。

「…ここが…イカリの湖…?」

思わず息を飲む。

まるで爆弾でも落とされたみたいに大地は大きく抉り取られ、泥混じりの瓦礫が辺り一面を埋め尽くすように散乱してる。

ウインディをボールに戻して、僕はその瓦礫が広がるクレーターへと足を踏み入れた。雨水の影響か少し抜かるんで歩きにくい。

「これは…なんて有り様だ…」

この光景だけでショウや団長達がどれだけの地獄を経験してヒスイに向かったのかがよく分かる。

団長がよく言っていた「野生のポケモンは危険」や「組織を守る責任」という言葉の裏にあるのがこの光景なのか。

今はまだ〟湖〟って感じじゃないけど、街が襲われてからかなりの日数が経ってるからか、中心部に近い程雨水が多く貯まって深く浸水してるみたいだ。

ひとまず歩ける所まで歩いてみよう。そう思った時だった。

「!!」

正にそのクレーターの中心、最も深く雨水が貯まってる中に〟ソイツ〟は居た。

(色違いのギャラドス！　いや、それよりなんて大きさだ　こんなサイズ見た事もないぞ)

親分個体よりも更に巨大、体長だけならたぶん〟キングのクレベース匹敵する〟規格外のサイズを持つ全身真っ赤なギャラドス。

どうやら町を滅ぼした後、そのままこの場所を縄張りにしていたみたいだ。ギャラドスは水辺に生息するポケモンだけど、普通に長時間飛ぶことも出来るし陸をメインで生活する個体がいてもそこまで不思議じゃない。

街一つを滅ぼしたってのは伊達じゃなく、水面から出てる背鰭だけでもその存在感は圧倒的だ。

回りは一面瓦礫の山、それに加えて抜かるんでる足場だ。足音を消して不意討ちするのは無理だ。そんな事を思っていると、

「ガアアアァァァ!!!!」

物音と気配を感知したギャラドスが水の中から勢いよくその体を持ち上げて激しい咆哮を上げた。

敵意はヒシヒシ伝わってくる。このまま戦闘に入るしかなさそうだ。

「これはかなり手強そうだ…」

この巨体だ。単純なパワーならパルキアよりも上かもしれない。戦力は備えて来てるけど、これはこっちもそれなりの被害は覚悟しないといけないな。

いや…待てよ。逆にこれはこれで都合がいいかもしれない。

「試してみるか。〟神様〟の力を」

僕は腰のボールに手を掛けた。

それは手にして以降一度も使っていなかった創造神からの贈り物。これ程の相手だ。このポケモンの実力を見定めるには丁度いい。
「さあ出番だ！行け！アルセウス!!」
思い切り投げたボールがギャラドスの目前で弾けるように開き、
「ーー！」
神々しい白い体が、不釣り合いな瓦礫の山にフワリと着地した。神秘的な嘶きを上げたアルセウスは本物と比べて一回り小さく、向かい合うギャラドスと比較すると両者のサイズは天地程違う。だけど、
「ガアァ！」
その姿を見た瞬間にギャラドスが僅かに萎縮した。
本能で何かを察知したんだろうか、今にも暴れだしそうだった巨体が目の前の小さなポケモンを睨んだままピクリとも動かなくなる。それはまるで森でリングマに出会った人間みたいに。
「ガアアアアァ!!」
でもその硬直は長くは続かなかった。
再びギャラドスが吠えたかと思うと、大きく開いた口に光の粒子が集まっていく。これは『破壊光線』か。あの巨体から撃つとなると威力は凄まじいだろうな。
下手をすれば僕も無事じゃ済まない。
「アルセウス！神通力で妨害するんだ！」
初めての命令にアルセウスの目が怪しく光る。
その瞬間、
「グギャア！」
巨体がドゴンと音を上げて”瓦礫の中へとめり込むように沈んだ”。
まるでギャラドスを中心にその周りだけ異様な重力が掛かっているみたいに、そこかしこからミシミシと何かが潰れるような音が鳴ってる。
神通力ってレベルじゃない。ここまでいくともう”重力操作”の域だ。このサイズのギャラドスが尾びれすら動かせなくなるなんて…

「凄いな…なんてパワーだ…」
想像以上だ。
同時に僕がアルセウスに挑んだ時、どれだけ手加減されてたかも思い知った。
分身でこれなら本体の全力は想像もつかない。
やろうと思えば、僕達なんてそれこそ一瞬で蒸発したんじゃないかと思うと背筋が凍る。
「ギャ……アァ……ォ…」
そんな事を考えてる間もアルセウスの神通力は止まる所を知らない。瓦礫と一緒に更に強くギャラドスの体を下へ下へと押し潰し、ミシミシと軋む音はバキバキという粉砕音に変わる。
一切の行動も許さないまま、戦闘開始から僅か十数秒で、赤い巨体のギャラドスは白目を向いて完全に動かなくなった。
「アルセウス、もう十分だ」
僕の指示にアルセウスは小さく頷くと、光っていた目が元に戻る。
「ご苦労様、やっぱりすごい力だね」
「ーー!」
喜んでいるのか、アルセウスは鳴き声を上げて軽く嘶いて見せる。
どうやら本体とは違って、分身体は人語を介してコミュニケーションを取れる訳ではないみたいだ。まあ本体に比べれば子供みたいなものだろうし、その技術がまだないだけかもしれない。
アルセウスを横切って、僕は瓦礫に半分体が埋まってしまってるギャラドスの前まで近付いた。
(…まだ死んではなさそうだ)
でも赤い巨体は全く動く気配はない。
まああれほどの超重力に10秒以上さらされてたんだ、如何に頑丈でも骨の数本は砕けていても何ら不思議じゃない。むしろ死んでいないだけ凄いのかもしれない。
(さて、後はこのギャラドスをどうするかだけど…)
少なくともこの場にこのまま置いておく訳にはいかない。捕獲して別の場所に逃がすべきか、それともこの街を滅ぼした大量殺戮の報

いとしてトドメを刺すべきか…
「まあでも…流石にそれだと後味が悪すぎるよね」
デンボク団長が何て言うかは分からないけど、多分ショウは殺す事までは望まない気がする。それに少なくとも僕個人はこのギャラドスに恨みらしい恨みはない。トドメを刺したとして、僕自身が得るのは『敵を討ってやった』っていう思い上がった自己満足だけだ。
(取り敢えず一通りの道具は持ってきておいてよかった)
僕は一旦ギャラドスを捕獲する事にした。
パルキアの空間移動で人のいない遠くの海辺に繋げてもらって、そこで放流しよう。生命力はかなり高いみたいだし、綺麗な海の中なら生き延びる事くらいは出来るだろう。
「さてと、それじゃあいったん遠くの海まで行こう…無人島っていえば、三日月島の辺りなら大丈夫かな」
もう日も真上、ウォロさん探しにジョウトまで来たけど、今日は流石に時間が足りなさそうだ。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「お父さん…お母さん…遅くなってごめんなさい…」
出来上がったばかりのお墓に集めた花束を備えてショウが手を合わせる。
ジュナイパーに手伝って貰いながら2人で建てたこの街の墓は、小さいながらも中々綺麗に作れたと思う。
勿論中に遺骨は入ってないけど、今まで手を合わせる場所すらなかったショウにとっては『そこにお墓がある事』が何より大きな意味があるみたいだ。
クレーターの外側に建てたから、ここが将来『イカリの湖』へと変わっても水没したりはしないだろう。
街がこの状態だから、あまり見なくていいようにもう少し離れたところに建てないかと提案してみたけど、ショウは出来るだけ街の近くに建てたいって事で此処に決まった。

「…私は今は遠くの土地で元気でやっています…デンボクさん達も一緒です。どうか心配しないで下さい…」
目を瞑ったままショウは手を合わせ続けてる。何せ数年分の報告があるんだ。それも当然だろう。
この光景をショウが見た時、最初こそ顔を覆って泣いていたけど、すぐに立ち上がって石の切り出しを始めていた。やっぱり彼女は僕なんかよりよっぽど強い。
「新しい出会いもたくさんありました。友達…?も出来て、テルって言うんですけど、今日此処に来れたのも、こうやってお墓に花を添える児とが出来たのも、全部テルのお陰です」
そうお墓に語りかけるのを真後ろで聞いてるのは何だかこそばゆい。
そのまましばらく手を合わせていた後、最後に「また来ます」と語りかけて、ショウが立ち上がった。
「もういいの?」
「はい…あの、本当にありがとうございました!」
「気にしないで。僕が勝手にやった事だから、それよりどう?気は楽になった?」
「はい…ずっと胸の内に引っ掛かっていた事でしたから…これでようやく、亡くなった人達に顔向けが出来ます」
気付けばもうすぐ夕方。
「じゃあそろそろ帰ろうか」
「はい!」
結局ウォロさんの捜索も逢い引きらしい事も何一つ出来なかったけど、まあまた明日一人でまた来よう。
ショウのこの笑顔とアルセウスの力を見れた事だけでも収穫だ。